

渡辺澄夫先生の最初の思い出

石 井 進

渡辺澄夫先生についての最初の思い出は、昭和二四年（一九四九）十二月、成城学園の民俗学研究所で柳田国男先生を中心に毎月一回、開かれていた談話会のことである。当時の私は新制高校三年生、何年か前から談話会に通っている民俗学の「門前の小僧」として、末席で諸先生のお話に聞き耳を立てていた。

渡辺先生の御報告は、大分県下をはじめ九州地方で広く行われている、ヒカリとよばれる共同飲食の会が実は室町時代の日記に出てくる「阿弥陀光」というくじ引から来たものだという内容で、民俗調査報告の多い談話会の一般の話題とはちよつと傾向が違っていたし、アマダくじの起源もわかったので、子供心にも印象深かった。この内容は雑誌『民間伝承』の翌年六月号に掲載されているが、中世の文献史料と民間伝承とをたくみに結びつけた、すぐれた論文である。

やがて私は昭和二七年（一九五二）に東大の国史学科に進学し、中世史の勉強をはじめたが、宝月圭吾先生からは時々、渡辺先生の御研究についてのお話をうかがった。ちよつと昭和二四年十月から半年間の内地留学で宝月先生のもとに來られた渡辺先生の、大和国若槻庄はじめ均等名庄園に関する研究はこの頃にはじまり、まことに精力的な勉強ぶりであつたらしい。その一方で、民俗学研究所ではヒカリの研究を発表しておられたのだから先生の研究範囲のひろさには驚嘆すべきものがある。

その後、大分たつて一九八〇年代に入つてから、宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の田染庄・都甲庄調査などに参加させて頂き、毎年大分県にお邪魔しては渡辺先生から親しくお教えを頂く機会も多くなつた。その最初の頃、渡辺先生に民俗学研究所談話会のことをお話ししたら、先生がビックリしておられたことを、今でもあざやかに思い出すのである。

（国立歴史民俗博物館長）